

『カタツムリ』

菊野 啓

突然の轟音が、工場内の静寂を破った。横倒しになったコンテナから、山盛りの部品がフロア一杯に撒き散らされている。ひよいと首を伸ばして、皆が一方向に目を向ける。白いマスクに防塵衣の姿は、川に舞い下りた白鷺の集団に見えた。

ミスしたのは、タカシと同じ派遣社員の半田だった。小柄な背中をさらに縮めて、無数の電池パックを拾い集める。ラインに着いた者たちは、手助けもできずに元の作業に戻った。ちよっと前まで三交代でフル稼働だった製造ラインは、半分以下に減産縮小している。降って湧いた金融危機とやらが原因だ。

「風が吹いたら桶屋が儲かる」と、正規社員の高木がちよっとずれたことを言う。

「ちがう。アメリカがクシャミしたら日本が風邪引くだろ」
笑っていたのがつい先月のこと、あれよあれよと世界中の何もかもがおかしくなった。アメリカが引いた風邪で、すべての国が寝込んでしまった。

リチウム電池では、世界的なシェアを誇るこのヤマサン電気にも、逆風が吹き下ろした。タカシたち派遣社員の多くは、本日締めをもつて雇い止めとなる。いわゆる派遣切りというやつだ。短大生の娘を持つ半田は、来年五十歳を迎える。年末というのに、求職者で混み合うハローワークに日参していた。

派遣会社なんぞに登録せず、正規の職を求めべきだった、と今さら後悔しても遅い。三年以上務めれば正規の道が開けると甘い言葉に乗せられ、いつでも切られる契約にOKしたのは自分たちだ。こんな時のためだったかと、今頃ようやく理解した。保険、年金も自前で、時間給の三分の一をピンハネされる。駅前には、派遣会社の大きなビルがいくつも建った。悔しいを通り越して、自分の甘さ愚かさにあきれる。

定刻にはすべての動力が落ち、工場内には早い日暮れが、冷たい闇を連れてきた。解雇通知一枚貰って、ロッカーの私物を片付ける。淡々と物事が進む。近くのうどん屋でお別れ会をしようと、高木が半田とタカシを誘った。用もないので、付き合うことにした。

注文は家族うどん二千五百円、子供が行水できそうな木の盥に、

大量のうどんが泳いでいる。三方から箸を突っ込み、艶やかで長いうどんを掬う。熱くて辛い付け汁にくぐらせ、すする。夕食時だというのに、他に客はいない。暇そうなレジ係の顔も冴えない。不景気という名の憂鬱が、風呂の壁の黒カビみたいに広がっていく。

「でも日本はまだいい国だよ。北朝鮮やアフリカみたいに、飢え死にすることはないもんなあ」

タカシよりふたつ年下の高木に、悪気はない。ただ、かなりずれる。「それ慰めになってない」軽く頭をはたいてやった。

高卒で就職してから一年間、高木は正社員として、タカシたちと同じ現場で働いてきた。仕事の手ほどきをしてやったのは、班長の半田だ。立場が違えど特別な意識もなく、仲良くやってきた。高木にはまだ解雇通知は来ていない。

「それに、自爆テロもないし」高木はさらに、ずれを広げる。

「平和呆けしてるよ、この国は。今回みたいに思いもかけない災厄が、これからも永遠に繰り返し続く気がする」

禿げ上がった額に玉の汗を浮かべて、半田は眉間に皺を寄せた。絶え間なくうどんをすすり込む。いくら食っても、盥の底が見えない。よほど大食いの家族を想定している。

半田がうどんを食す姿を見てみると、なぜだかほっとする。困窮しながらも、肉体は旺盛な食欲を発揮して、けっこう逞しく主人を支えている。歯科大学に行った知人から、人間は一本の消化管に過ぎない、という例えを聞いたことがある。口から肛門に繋がる長い管、その機能を維持するためだけに、脳や四肢、他のすべての臓器が付属すると考えるとわかりやすい、と彼は笑った。

「ミミズみたいなもんか？」

タカシが聞くと、「そのとおり。ウンコという黄金を産み出すために生きている」と頷いた。半田の消化管は、十分すぎるほど健康で図太い。大量のうどんを消化しようとのたうっている。

「なににせよ。まず腹一杯喰おう。落ち込んだときはそれが一番。ほら、まだ残ってるよ」と二人に促した。布袋のように膨れた腹をさする。

「いつも予期せぬことが起こると考えておいた方がいい。起こったら、物事の状態を見定め、冷静に最善の策を講じるわけだ。兵法をいつも腹に持つ。そして、最後には必ず勝つ。五輪書を読み」首に掛けたタオルで汗を拭う。

「それって宮本武蔵ですか？」漫画で読んだ、と高木が言う。

「何かいい方策はありましたか？」

タカシも消極的ながら職探しを始めていた。

「ない」と言下に、半田は首を振る。

「けして、焦ってはいけない。俺なんかこれまでの人生五十年で、

いろいろあったが、すべてなんとなくかなった」

半田がいろいろな仕事を、否応なく転々としてきたことを知っている。古ぼけた賃貸アパートに住むが、それでもまともな家庭を築いているらしい。「それにしても今回は、けっこうきつい」と爪楊枝で奥歯をつついた。

「急ですもんね」高木もまるで人ごととは思ってないようだ。

「こんな時こそ夢を語れ。下を向くな」

自分に言い聞かせるように、半田はまじめな顔で語り始めた。定年近くまで働いて娘が片づいたら、小さくてもいいから農地を買って百姓をやりたい。食う物が自給できて、あとは寝る場所さえあれば、何があっても乞食になることはない。首を切られる心配もない。お日様を追いかけて働きたいときに働き、移ろう季節の中で寿命を朴訥に全うする。そんな暮らしが夢だ、と言った。

「いいね。夢か、俺も何か考えなくちゃ」と高木が目潤ませる。

「大丈夫さ。君らはまだ若いもん」半田は優しい。

「俺たちばかり励まされてどうする」

タカシはちよつと居心地が悪くなって苦笑いした。

「試合はまだこれからよ。仕事だっけとみつかる。もつといいところが雇ってくれるさ」どこまでも樂觀的だ。

「蓼食う虫も好き好きって？」

こいつのずれは、致命的に矯正不能だ。

「捨てる神あれば拾う神ありだろ。馬鹿。今夜はおまえのおごりな」と言うのと、「当然っすよ」洪々答えた。

満腹をかかえて店を出た。冷たい木枯らしが頬を叩く。軽く手を挙げて、三人は別れた。

タカシはバイクの後ろに荷物をくくり、エンジンをかけてそろそろと走り出す。クリスマスシーズン最中には、いささか街の飾り付けも寂しい国道をひた走った。赤いオフロードバイクは、プレゼントを持たないサンタの乗る、痩せたトナカイのように見えた。

二

昼過ぎになって、やっと目が覚めた。ああ、今日から出勤しないでいいのかと思うと、かえって二度寝できなくなった。ごそごそと起き出し台所へ行くと、妹のサトミが、不機嫌そうな顔でトーストを囓っている。

「あれ？今日って日曜日だっけ？」タカシが冷蔵庫を開けながら聞くと、「冬休みだから」と素っ気なく答える。

「なんか怒ってる？」牛乳パックを口飲みした。

「べつに」やっぱり様子がおかしい。

「今日はスケッチに出かけないのか？」

県立高校二年生のサトミは、美術部で絵を描いている。デザイン関係のクリエーターになるのが夢だ。

「行かない。寒いから」

冬には冬の描く物がある、と自転車でもどこにでも出かけていた。彼女の絵はけっこうクールだ、とタカシは思っている。

「まあ、もうすぐ高三だし、少しは受験勉強もしなきゃな」

「あたし、進学するのやめようかと思う。お金かかるし」

東京の芸術大学を志望していたはずだ。進学を取りやめ、市内のデザイン室に就職して、絵を続けると言う。

「それって、俺の派遣切りと関係ある？」

「ない。あたしの進路だから。自分で考えて決める」

頑なに唇を結んだ。こうなると妹は手強い。

「東京に行けよ。その方がきつといい。絵をやる夢はどうした？」

「芸術は死んだ」きっぱりとサトミは言い「お母さんも体調悪いし。」

働いて少しでも助けたいんだ」とけなげに付け加えた。

「もつとずっと先のことでもいいよ」

「今が大変でしょう」

あんたもそんなだし、という言葉が後に続く、はずだ。

「俺もすぐ次の仕事見つけるさ」言ってはみたものの、あてはない。

「だからあ、あんたとは関係ないってば。あたしの問題だって」

呑気に構えていたのが、急に恥ずかしくなった。

「クリスマスだぞ。不景気なこと言わずに、街に出ろ」支離滅裂だ。

「言われなくても、バイトだよ」とデイバックを掴んで、サトミは家を出て行く。立て付けの悪いドアが、乱暴に閉まった。

妹の低気圧の原因は貧困にある、とタカシは思う。お金の困われるのは嫌だが、生きていくためには、それが必要だ。食うためには働かなくてはならない。この原則に縛られない生活を夢見るが、無職に転落したばかりの現実は厳しい。何より自分が、せっぱ詰まった気になっていないのが情けない。

「この緊張感のなさは何なのだ？」

タカシは己の不甲斐なさを見つめ、そこに父親の血統を感じて慄然とする。父にどんどん似てくる。量の多い黒髪、濃い眉、彫りの深い顔立ち、がっちりした肩幅の長身、写真なんか見分けがつかないくらいそっくりだ。一見二枚目の父は、仕事の長続きしない男だった。五年ほど前に、母とは離婚した。

父が大学生だった頃、母の故郷の広島で二人は知り合い、結婚して四国のこの街で暮らし始めた。父は中学校で教鞭を執り、生物学を教えた。すぐにタカシが生まれた。すべてがうまくいった。芹沢家にとって、最も幸せな数年間が瞬く間に過ぎ、サトミが生まれた。

それからしばらくして、歯車が狂い始めた。

父はしだいに学校に行かなくなる。なにかが嫌になった。弁当を持って朝出かけるが、パチンコ屋に出勤した。週のうち、それが二日三日と増えていくと、PTAの間ですぐに評判になる。いられなくなり、せっかくの教師を辞めてしまう。長いこと、家でごろごろしていた。母は嘆き悲しむと同時に、近くの機械製作所で事務仕事を始めた。生活のためだった。

父は顔のいい男だった。その後、駅前のホテルで働き始める。機転の良さを認められ、フロントを取り仕切るようになった。五年ほど務めると、また何かが嫌になった。仮病を使ってしょっちゅう休む。しまいに、客の落とし物をくすねたとかで、免職となった。

次の勤務先は、葬儀屋だった。ここでも顔の良さと口の滑らかさを大いに発揮して、店長を任される。遺族を感謝で泣かせるほどの仕事ぶりだった。五年ほどは非の打ち所のない真人間である。しかし、またしても何かが嫌になる。今度はフィリピンパブに入り浸った。フィリピン女の部屋にしけ込んで帰らない。仕事もすっぱかす。酒はいくらでも飲む男だった。飲み代に困って、とうとう店の売り上げを着服する。警察に突き出されただけよかったが、当然クビになった。

良からぬ金も借りていた。朝、昼、晩と人相の悪い借金取りが、自宅のドアを乱暴に叩く。安普請のアパートが、建物ごと揺れた。タカシは、すでに高校生だった。父が泣きながら、取り立て屋に土下座するのを見た。恐い男が帰ると、けろりとして酒を飲み、テレビのナイター中継を観ている。一家の生活は、母親の給料で賄った。

結局、父はフィリピン女と駆け落ちした。有り金を使い果たし、首が回らなくなると、しおしおと帰宅するような男だった。さすがに母のキミコも愛想を尽かす。父を残して母子三人、行き先も告げず、別のアパートに出奔した。あっさり離婚が成立して、すでに五年、父のその後は誰の口にも上らない。

離婚してから、母は子供二人を養うために働いた。その金でタカシは地元の短大に通った。アルバイトに明け暮れ、薄ぼんやりと大學生生活を過ごし、とりあえず卒業した。電気工学を学んだが、何の役にも立たない。ろくな就職も決まらず、さらにアルバイトを繋いだ末に、派遣会社からヤマサン電気に入った。一流企業で名前の通りはいいが、製造ラインの一部に過ぎない、ただの工員だった。それでも正社員としての採用を期待して、無遅刻無欠勤、人が変わったように働いた。しかし、金融危機とやらであえなく、派遣切りに遭遇した。憤慨したところで、どうにもならない。そのうちまた、どこかに潜り込めればいい、と格別焦りもない。危機意識の麻痺した、父親そっくりの男がそこにいた。

疑いようもなく、ダメ男の血が自分にも流れている、とタカシは思う。自分自身を信じることができない。弛みの血漿が血管中を巡って、精神をだらけさせる。木の上から見下ろす、もう一人の自分が熾烈な嘲罵を投げかけてくる。石を投げ返すのも億劫な、どうしようもない自分がここに在る。何かが嫌になるという父の特性を受け継いだ、人を幸せにしない愚か者がそこに蹲っていた。

ぼんやりテレビを眺めていると、母のキミコが帰宅した。気分が悪くて、会社を早退してきたのだという。

「あら、いたの。そうか、仕事探さなきゃね」

キミコは、クビを切られた息子への心遣いを見せる。この母を、貧困から救う方法を思案する。しかし、微塵もあてにはされていない。

キミコが離婚したとき、故郷の広島に帰らなかったのには理由があった。まだ教育に金のかかる二人の子供を養うために、十年以上務めた機械製作所を辞めるわけにいかなかったのと、「観音経」という宗教に帰依していたからだ。

毎週、キミコは信者の集まりに出かけていく。護摩焚きに一回五百円ほどの浄財を投資し、わずかな心の平安と癒しを所与されてくる。その全国に何万人もの信者を持つ宗教法人は、不景気に沈む街の不動産を買い漁り、布教の拠点作りに余念がない。積もり積もった五百円で、大理石のビルが建った。果ては海外のオークションに参加し、古びた仏像を何億円もの資金で落札したことが報じられた。

インチキな宗教に関わらないよう忠告なんて、到底できない。余裕のないキミコの日常に、ひとつまみの慈雨をもたらすものであれば、出会い系サイトだろうが何だろうが気にしない。愚痴ひとつ、子供に言ったことはない。神仏に救いを求めて、何が悪い。

「じつは、あんたに頼みたいことがあるんだ」
疲れた顔で、キミコが言った。

「広島のおばあちゃん、最近腰を痛めて大変みたいなの。寝たり起きたりみたいで、石みたいに頑丈な人だったんだけど。耳も遠くなってる、歳だから」

祖母は連れ合いを数年前に亡くし、一人暮らしをしていた。

「広島に行つて、どんな調子か見てきてほしいのよ。できたら、しばらく滞在して助けてやってほしい。年末には私も行くと思うんだけど、仕事と体調で、ちよつと無理みたい」

キミコは更年期障害だと言い張っているが、総合病院で検査中の患者は、甲状腺の疾患を疑っているらしい。癌でなければよいが、とキミコは青白い頬をすぼめた。

「お願い。どうせあんた、ヒマでしょ？」 継るような目を向ける。

「いいよ、久しぶりに、ばあちゃんにも会いたいし」

おやすい御用、と無職無能の息子は答え、数年ぶりに祖母に会える

ことを楽しみに思った。

「クリスマスが終わったら、すぐに発つよ。そう知らせておいて」

「ありがとう。恩にきるわ」

キミコは手を合わせて拝む仕草をし、少し休むからと上着を脱いだ。寝室に入り、横たわる気配がしたので、タカシはテレビを消した。何もすることがなくなり、キッチンの椅子に座ったまま欠伸をした。

自ら掴み取った貧困、行動を伴わない焦燥、諦観に裏打ちされた鈍感、どんよりとした暗雲が真綿のようにじわり、我が身を締め上げていくのに任せている。急坂を転がり落ちていく実感はあるが、いまだジェットコースターほどの恐怖もない。ハローワークに寄って、ネットカフェにでも籠もるか、タカシは冴えない顔で家を出るのだった。

三

「そう、じゃあ仕方ないわね」と本村ナオコは、煮え立ち始めた鳥鍋をつつきながら、表情を変えずに言った。

「広島に用もできまし、無職にもなったしで、正月の約束は悪いけどパスな」

「いつから行くの？」

「明日、早くに出ようと思う」

恋人と過ごす楽しいはずのクリスマスの晩が、初っぱなからガラガラと音をたてて崩壊していくのを眺めている。

「いいよ。好きにしたら。両親には、あたしからうまく言っておく」元日には、ナオコの家を招かれ、両親に紹介される予定だった。

「派遣切りのことなら気にしないでいいのに、べつに正直言ったとかまわらない。あなたのせいじゃないもの。両親だって同情してくれる。私の父に職探しを頼んでみたっていい」

ナオコは素直な女性だ。損得だけではない、つぶらな愛を向けてくれる。しかし、見かけだけとはいえ一流企業の社員と、寄る辺ない無職とでは、両親にお会いする顔つきも違ってしまふ。

ナオコとは、一年前に知り合った。毎年この街の音楽家が集まって開催する、ジャズストリートというイベントに参加した帰り、余韻を楽しもうと立ち寄ったショットバーのカウンターに、一人でいたのが彼女だった。同じパンフレットを持っていたのが、きっかけだった。グラスを傾けながら、ジャズの話に始まり、いろいろなお喋りをした。

「あたし、カタツムリを飼っているの」

「でんでん虫のこと？」

「そう、電力会社に勤めるからってわけではないけど」

タカシより五歳年上の二十七歳、県外の大学を出て、出身地のこの街に本社のある企業で働き始めた。俺も毎日電池を作っている、と言ったら、おかしそうに笑った。椅子ひとつ空けて座っていた二人の距離が、いつの間にか縮まっていた。

彼女は勤め先に近い1LDKのマンションで、一人暮らしをしていた。はじめてその部屋を訪れたとき、タカシはカタツムリが飼育できるのだということを知った。

セルロイドのイチゴパックにサララップをかけ、無数の空気穴を開けた容器が並んでいる。小さな緑色の若葉を散らした中に、貝殻に似たそれらが這いずっていた。顔を近づけると、驚くでもなく悠然としている。青臭いにおいがした。

「螺旋形には、右巻きと左巻きがあるの」とナオコは愛おしそうに解説した。

「雄が左巻き？」

「ううん、カタツムリは雌雄同体、卵を産んで殖えるの。だんだん子供ができて、こんなになった」

ナオコの指先の向こうに眼を凝らすと、直径三ミリほどの子供の力タツムリが確認できた。

「子供にも目が二つあるね」

乾燥に弱いから毎日霧吹きで水をやる、葉っぱの柔らかいところを食べて生きるのだという。

「一人で生きても、子孫を増やせるってところが羨ましいわね」とナオコが意味深に言った。

「一人でも寂しいと思わない人間にとってはね」

「人は一人じゃ生きられないなんて言うつもり？」

「とんでもない。人は一人で生まれてきて、誰と一緒にいようが常に一人分の孤独に耐えながら生きて、そして一人で死んでいくものだと思っっている」

「カタツムリみたいに？」

「そのとおり」

「なんだか、生きにくい世の中に変わってしまった。とくに、いい歳の女が一人で生きていこうと思うとね。どっちを向いても窮屈で、息が詰まりそう。あたしが大人になり過ぎたせいかしら？子供の頃の遠足の日の前夜みたいな、浮かれた気分が懐かしい。田舎に行っても、カタツムリなんてどこにもいなくなってしまったし」と溜息をつくナオコの気持ちだが、何となく胸に落ちた。男のタカシだって、歳をとるにつれて、少しずつ自分の居場所が縮小した気がする。

「人間が殖えすぎたのがいけない」

暗くなりかけた話題をそらそうとして、タカシは喋った。

「世界の人口は六十六億、人類は誕生してからわずか四百万年の間

に地球上にはびこった。地球ができてから四十六億年というから、たとえばこれを一年に例えてみる。地球が一月一日の午前0時に生まれ、今が大晦日の夜十二時だとしたら、人類が生まれたのはいつ頃になると思う？」

まじめな顔で思案したあと、ナオコは「十二月三十一日の午後五時頃」と答えた。

「正解、さすが」とタカシは親指を鳴らして続けた。

「つまり生まれてから、たった七時間しかたっていない。しかも七時間のうちのほとんどを、地球を苛め過ぎることなく、カタツムリと一緒に仲良く暮らしてきた。ここ二百年くらい、つまりさっきのたとえで言う最後の一秒で、これをとんでもなく破壊し尽くそうとしている。人間とは、なんとたちの悪い害虫であることか」

「環境のためには、人間が減ればいいってこと？」

「そう、最良の環境対策は、世界の人口を無差別に、せめて十分の一くらいにすること。そのうち、核戦争が起こるか、巨大な隕石が降るか、おっかないウィルスが蔓延するかして、嫌でもそうなるかもしれないけど。あとは地球が勝手に回復浄化してくれるさ」

「なんだか、話ちよつとずれてきてない？」

微笑しながら、ナオコが肩を寄せてきた。

「うん、わかってる。言いたいのは、君や僕の孤独の悩みなんて一瞬の泡沫の夢、たかがしれてること。カタツムリは悩んだりしない」

抱き寄せながら、そっと唇を合わせる。その夜、簡単に、お互いを手に入れ合った。

それ以来、時々泊まっていくようになった。結婚を意識したことなど、タカシの方にはなかったが、正月に両親と会わせたいというナオコの口ぶりからは、いつにない特別なものを感じていた。ナオコとなら、それでもいいかと思いついて始めた。そのわずか一ヶ月後の今は、まったく温度と方向の違う風が吹いている。予期せぬつむじ風に、大切なものが吹き飛ばされようとしていた。

「あなたの自由にすればいいよ」とナオコは目を合わせないで言った。鳥鍋はいつこうに減らず、煮詰まりはじめていた。グラスのビールも進まないまま、泡が消えてぬるくなっている。

「ごめん。すぐにまた埋め合わせするよ」

「謝る必要なんかない。時々一緒にいられるだけで、お互い十分なのじゃない？」

親鳥が交代で卵を抱くように温めてきた二人分の孤独、それが突然放棄されそうな予感が、二人を気まぐしくしていた。かさかさカタツムリが葉っぱの上を這う音も、その気分を和ませることはできなかった。

翌朝、タカシは一週間分の着替えや身の回りのものを詰め込んだ小ぶりのボストンバッグを、ホンダXL250のリアシートに括りつけ、祖母の待つ広島を目指して走り出した。身を切る寒気が海を越えて頭上をすっぽりと覆い、北から吹き下ろす乾いた風には、花びらのような雪が混ざった。

瀬戸内海を目指して国道を進み、坂出から高速に乗った。人類の叡智を誇示する巨大な吊り橋の上を、赤い豆粒のようなバイクで渡る。横殴りの突風に、バイクごと数メートルも吹き飛ばされる。眼下に広がる、荒くれた海を見下ろす余裕もない。ひたすら前を見据えて、ハンドルにしがみついている。

かじかんだ手足は、乾いた棒きれのようだ。重ね着した防寒具の隙間から、容赦なく這い込む冷気が、体中の血を冷やす。凍った涙が、視界を滲ませる。何も考えられずに、ただ耐えているだけだ。思考回路まで、凍結寸前だった。

海から離れた内陸を、高速道路は延々と続く。渦巻く風花のチューブの中を、しゃにむに突き進んでいく。大型トラックが次々と、すぐ隣を追い越していった。運転手が珍しいものを見つけたような視線を投げかけ、嗤う。バイクの無防備さを侮り、非常識さを嘲っていた。半ばやけくそで、睨み返した。

広島の前を大きく行き過ぎ、山の方向に分け入る。祖母の住む団地は、山肌を削り取って造成されたベッドタウンのひとつだ。昔、何度か訪れた記憶を頼りに、いたるところ坂になった道を探す。

やっと辿り着いたと思ったとき、一瞬の油断が生じた。路面に潜む、凍ったマンホールの蓋を踏んだのだ。気付いたら固いアスファルトに投げ出されていた。バイクが碎ける音を、すぐそばで聞いている。身動きひとつできないまま、大の字に転がっていた。

ヘルメット越しに、目の前の大きな家を見上げる。助けを呼ぼうにも、喉が潰れて声が出ない。張り出した二階の出窓のカーテンが開いた。誰かの陰鬱な視線があらわれた。顔は見えない。背筋に嫌なものを感じた。

足音が、近づいてきた。恐怖を覚えて叫ぼうとしたが、声が出ない。殺されるかもしれない、と脅えつつ意識を失っていった。

目を覚ましたとき、自分がまだ生きていることを、タカシは強い頭痛と耳鳴りで確認した。布団の中に、寝かされている。天井の木模様を、ぼんやりと眺めていた。どれくらい時間がたっただろう。窓の外は明るい、いつの陽差しなのかわからない。壊れたバイクのことが気になった。

「やあ、目が覚めたかね？」

見覚えのある祖母の顔が覗いた。

「大変じゃったねえ。頭、少し打つとるけど、ただの脳震盪じゃろうって。坂の下の井内先生にも、来てもらうたんよ」

転倒したタカシを助けてくれたのは、打越という人で、医者を呼んだり、この家に運んだりしてくれたいという。

「もうしばらく寝とつたらええ」

祖母のトシコは、耳が遠い。自分だけ一方的に喋って襖を閉めた。

とろとろと、また浅い眠りに落ちた。再び目を開けると、暗闇だった。頭痛がまだ続いていたが、耐え難い喉の渴きを覚え、重い綿の蒲団から抜け出した。よろけながら光を求めて、襖を開ける。

異臭が、タカシを迎えた。強烈なアンモニア臭に、目の痛みを覚えるほどだった。手探りで、隣室に足を進める。闇の中で彼を見つめる、何者かの視線を感じた。

猫だった。しかも何匹もいる。無数の目が、ガラスビーズのような無機質な光を湛えて、こちらを見据えている。壁のスイッチを探して、足を踏み出した。灯りを点けたとたんに、平和の均衡が破れ、一気に大騒ぎとなった。

唸り声を上げて、部屋中をぐるぐる回る。ソファの上からサイドボード、テレビの上へと、あらゆる物をなぎ倒し、飛び交う。ガラスの割れる音と、獐猛な唸り声が交錯する。足元に柔らかい体毛が触れた。鋭い爪で素早い攻撃を仕掛けてきた。脛に噛みつくヤツもいる。為す術もなくおたおたしている、台所からトシコが、にゅっと顔を出した。猫たちは一喝されると、しゅるしゅると彼女の背後に姿を消した。

翌日から、タカシは家中の掃除をはじめた。そうしなければ、到底いられなかった。痛めた腰で手伝おうとするトシコを二階に追いやり、掃除機と雑巾片手に働いた。山のようなゴミを片付け、台所や廊下を拭き上げていった。細かい猫の毛で噓せかえる。排泄物の臭いが、嗅覚を麻痺させる。猫どものトイレを洗い、砂を替えてやった。姿が見えないと思ったら、ぼうぼうに生い茂った庭木の間に、きれいに並んで顔を出し、疑り深そうにこちらを見ている。引つかかれた傷をさすりながら、窓を大きく開け放つと、一番太った黒の鉢割れ柄が、にやあと媚びるように鳴いた。

「ダイフクじゃ」とその猫の名前を、トシコが教えてくれた。シマ、クロ、シロとその名の通りの四匹だけが、家の中に入るのを許されているという。どれも捨て猫で、拾ってきたわけではないが、餌を投げ与えているうちに居着いた。今は猫を家族として、気ままに一人暮らしを楽しんでいる、とトシコは笑った。

猫たちは、すぐにタカシを仲間だと認めたようだ。夜は襖一枚、

隔てて眠った。タカシの寝る和室の仏壇には、数年前に亡くなった祖父の遺骨が、まだ納骨されずにあった。墓を物色中だという。

毎朝、トシコが枕元に訪れる音で目を覚ました。仏壇に向かつて手を合わせている老女の横に、四匹が大きい順に揃って座っていた。もぐもぐと口の中で唱える読経が終わるまで、猫も一緒になって折っている。タカシもその末席に加わって、真似てみることにした。ルビの振ってある般若心経の冊子を貰った。意味はわからないが、声に出して読んでみると悪くない気がした。猫も機嫌良さそうに、目を細めている。祈りがすんだら、猫たちと一緒に、トシコが作った朝飯を掻き込んだ。

何の感銘もない年が明けた。新年を祝う町内会の集まりがあると、いので、足腰の弱いトシコに付き添って、集会所に出かけた。

広い公園の敷地に建つ二十坪ほどの集会所には、それぞれに着飾った老人たちが集まっていた。すぐに輪が割れて、腰を痛めて以来、久しぶりに姿を見せたトシコを迎えた。中央に据えられた大型の石油ストーブの上では、鍋が湯気をたて、雑煮とおぼしき汁が煮立っている。

「やあ、あんたがお孫さんか、話は聞いとるけえ」と、ごま塩頭で赤ら顔の老爺が、人なつこい目で話しかけてきた。町内会長の島田と自己紹介した。近隣との付き合いを好まない若い世帯が増えて、町内会の集まりが老人ばかりになりつつあると嘆いた。タカシの現況を詳しく聞き、ぜひともトシコの家によく滞在して助けてやって欲しい、と身内のように頼んだ。

振る舞われた雑煮に箸を付けながら、立ち話していると、ストーブのそばで騒ぎがおきた。一人の小柄な老婆が蹲り、胸を掻きむしっている。島田が血相変えて駆け寄る。背後に回り、両の腕で腹を抱き絞った。タカシに背中を叩けと言う。老婆の折れそうな背中を、掌で打った。ごほっと、声をたてて入れ歯を吐き出した。赤い歯肉のついた総入れ歯が、足元にぼとりと落ちた。

「餅はやめときんさいって言うところが、ウメさん」

島田は、肩で息をつく老婆に言った。

「いつ死んでもええわいや。餅で死ねりやあ本望よ」
餅に食い付いた上下の入れ歯を拾いながら、ウメさんはもぐもぐと言った。見ていた数人が笑い出した。老人たちの輪に笑顔が戻った。

毎年わかっているながら、餅を喉に詰める老人がいて、雑煮の振り舞いをやめようというのに聞かないのだという。島田は自分も含めた老人たちの頑固さに肩を竦め「まあ、わしら後期高齢者は、怖いもんなしじゃけえ」と笑った。

「あなた、体は大丈夫でしたか？」

グレーの髪の毛をオールバックに撫でつけ、色つきの眼鏡をかけた

男が声をかけてきた。打越だと名乗る。なまりのないきれいな標準語だった。周囲の広島弁に慣れかけた耳には、新鮮に聞こえた。しかし、喉を擦るしわがれた声だった。気管に穴でも開いているのかと思える。その声には、妙な凄みがあった。

「ああ、先日は助けていたいただいてありがとうございます。お礼にも伺わなくて、すみません」

タカシが頭を下げると、黒い顔に皺を寄せて、打越は手を振った。「いいから、そんなこと。それよりバイクはどうしたのかね？」

壊れたままだと答えると、自分が直してやるから持って来いと言う。「これでも昔は、私もハーレーに乗ってたんだ」

ポマードのにおいが鼻を突く。量の多い髪は鬘にしか見えない。顔の肌も人工的な張り具合で皺ひとつなく、年齢も窺い知れない。不気味な容貌を持つ男だった。

散会になり、島田とトシコの三人で、坂をゆっくりと散歩しながら、家路についた。

「あの、打越っちゆうのとは、つきあわんがええ」

まじめな顔で、トシコが忠告した。

「うん、ほうじゃの。町内会でも、あんまり相手にするもんはおらん」島田も同調する。

「助けてくれたお礼を言いました」タカシが言うと、「礼は、わたしがしといたからもうええって」トシコが遮った。

「猫を殺してまわつとるっちゆうて、みんな気味悪がつてな」

町の中の野良猫だけでなく、首輪を点けた飼い猫も姿が見えなくなっているのだという。打越が保健所に届けた物は、ゴミ袋に入れた猫の死体だったらしい。目撃した誰かが、噂を流した。

「うちの猫も、アカとアオがおらんようになった」

二匹の黒猫が忽然と姿を消したと、トシコが顔をしかめた。

「それより、タカシ君、しばらくこの町におるんなら、正月の間だけでもバイトせんね？」

町内会で管理運営している温水プールの監視員が、突然辞めて困っているのだという。

「たいした時給は出せませんが、子供たちがおぼれんように見とつてくれりやええだけで、簡単な仕事じゃけね」

午後の三時間だけを、トシコの勧めもあって、その場で引き受けることにした。

タカシは、この町にどこか懐かしさを感じていた。そろそろ猫たちが腹を空かして、帰りを待ちわびている頃だろう。路傍の家から、夕食のにおいが漏れてくる。背後の集会所のスピーカーが、午後五時を知らせるドボルザークの「家路」のメロディーを流し始めた。

翌日から早速、タカシはプールの監視員のアルバイトを始めた。団地の真ん中に、スポーツジムと二十五メートルプールを持つドームが、バブルの頃にオープンして十年以上になる。経営は当然赤字だが、子供や老人たち町民の憩いの場として、行政の力を借りながら、町内会が維持管理してきた。

プールは四つのレーンを持ち、隅にはジャグジーバスも備えている。水着姿でプールサイドのチェアに座り、利用者の安全を監視する。水深百二十センチほどの温水プールで、室内は凍てつく窓外が嘘のように温かい。全面ガラスの仕切からは、ぼかぼかと春のような陽差しが差し込み、眠気を誘う。

今日は、障害児の水泳教室の予約が入っていた。タカシより一回り年配とおぼしき女性が、三人の児童を引率してやってきた。三人は兄弟姉妹のように、顔が似通っている。

女性が子供たちにてきぱきと指示し、準備体操のあとプールに入った。一番年少の女子が、尻込みしてどうしても入ろうとしない。あとの三人は、かろうじて背が立つらしく、顔を上げてその子供を見守っている。

小柄な女性は笑いながら、その子に近づき、一気に抱き上げ、プールに入れた。パニックになった子供は、女性の腕にしがみついて泣き叫んだ。彼女はするりと腕を抜き、握り合った手を伸ばして、ふわりと水に浮かべる。何が起こったのか飲み込めない子供は、しばらく泣いていたが、やがて水に浮かぶ気持ちよさに目覚めたのか、そろそろと動き始める。しつかり女性の手を握ったままだ。四人は浮かんだり沈んだりしながら、行き来を繰り返した。

「あなたも水に入って、指導を手伝ってもらえないかしら？」と目の大きい女性が、タカシに笑いかけながら言った。

他に利用者は、一人もない。頷いてシャツを脱ぎ、プールに飛び込んだ。生温い水が、皮膚を滑らかに洗う。

「大きい二人を、そちらのレーンで泳がしてやって」

指示されたとおりに、タカシは二人の児童の後ろを歩くことにした。小学生らしき児童は、不器用なクロールで、ちゃぶちゃぶと泳いでいく。気持ちよく往復するうち、親子で遊びに来たような錯覚にとらわれた。いずれ自分も家庭を持つようになるのだろうか、タカシはナオコの顔を思い浮かべ、呑気な照れ笑いを浮かべた。クリスマス晩以来、お互いにメール一本やりとりしていなかった。

プールの時間が終わり、ロビーでくつろいでいると、子供たちを連れた女性が出てきた。

「さつきはありますか。監視員さん」

武知クミコです、とよく揃った白い歯を見せる。小ぶりな鼻の両脇に雀斑のある丸顔は、化粧品はないが健康そうに輝いている。ソファに並んでかけて、しばらくお喋りした。子供たちは、キッズコーナーのブロックで遊びはじめた。

「この子たち、ダウン症なの。一番小さな子は私の子供」

プールに入るのを最初怖がっていた女兒は、アカネという名前で四歳だった。子供たちの顔つきが似ているのは、ダウン症児に特徴的な顔貌なのだという。

「アカネには心臓に欠陥があつて、近いうちに手術が必要なの」

クミコは言い「あなたは学生さん？」と聞いた。

「いいえ、派遣切りにあつたばかりの無職です」

クミコのくつろいだ雰囲気、タカシを素直な気持ちにさせた。あたかも、久しぶりに会った姉と話しているようだった。

「あら、そう。お気の毒に。でもどうにかなるわよ。私も三年ほど前、この町に来たばかりの時には、アカネと二人、お先真つ暗だったもの」

クミコはロビーの自動販売機からコーヒーを買い、熱い一本を手渡してくれた。優しい目を、注いでくる。札を言つて、受け取つた。

「死のうかと思つたこともある」と暗さを微塵も感じさせない口調で言う。コーヒーの香ばしい匂いをさせながら、彼女は話を続けた。

クミコは三年前に、銀行員である夫と離婚して、この町にやってきた。市営住宅に空きがあるのが、この町だけだったからだ。身寄りや知り合いがいるわけではなかった。別れた夫からの多くはない養育費と生活保護で、どうにか暮らしは成り立つ見込みだった。

離婚に至る過程は、彼女を大きく傷つけ疲弊させた。アカネの障害にまつわる夫の無理解が、離婚の原因だった。

派遣切りにあつたタカシへの同情のせい、クミコは何のてらいもなく、自分に関する込み入つた話を口にした。口ずさむような話し方だった。それを黙つて、聞いていた。

アカネにダウン症という先天的な障害があることは、出生前からわかつていた。クミコが妊娠したのは三十二歳、夫が三十七歳の時で結婚から五年以上がたつていた。ほとんど諦めていた初めての懐妊を喜んだのも束の間、妊娠中の検査から、その事実が判明したとき二人の落胆は大きかった。

しかし、その後の夫婦の反応は、正反対のものだった。妊娠するのは最後のチャンスに思えた。障害があるとはいえ、クミコは我が子を産んで育ててみたかった。夫は仕事のできる強い人間だし、子供と三人で、普通の家庭を作つていけると疑わなかった。ところが、夫は頑なに中絶を勧めた。君は正常な判断力を失っている、と出産を熱望するクミコに言った。

「その子供は、君の人生の大部分を奪ってしまふ」と彼は主張した。子供に奪われる人生がそんなに不幸かしら、と彼女は思った。

「それに、我々が生きている間はいいかもしれないが、その子が親より長生きしたときには困るだろう。その子のためにも生まれてこない方がいいんだ」と言うのを聞きながら、クミコは拠り所としてきた夫との愛が、ただの幻影に過ぎなかったことを思い知らされる気がした。彼は何より、銀行員としての自分の地位や世間体を重んじているように見えた。

クミコは出産を決意した。周産期になると一人で準備を整え、入院先の病院で、無事アカネを産んだ。赤ん坊の顔を見たら夫も変わってくれるかもしれない、と淡い期待も抱いていたが無駄だった。ダウン症の子供を、夫は愛することをしなかった。アカネが一歳の時に、協議のうえ離婚し、この町に移り住んだ。もとよりこうなることは覚悟の上での出産だったにもかかわらず、いいようのない寂しさが彼女を襲った。夫を恨むよりも、父親のいないアカネに申し訳ない気持ちで一杯だった。しかし、後悔は微塵もなかった。アカネを愛していたからだ。

この町の老人たちが、クミコを助けた。何かと声をかけ、町内会の集まりや公園での遊びに誘ってくれた。彼女は少しずつ元氣を取り戻し、障害児でも受け入れてくれる保育所を見つけてアカネを預け、その時間だけ近くの弁当屋で働きはじめた。同じ障害を持つ子供の親と横の繋がりもできて、このプール教室も開くようになった。将来、アカネと一緒に自分の弁当屋を開店することが夢だ、とクミコは語った。

「ママ、ママ」と赤い頬を膨らませながら、アカネが駆けてきた。言葉は不明瞭だが、お腹が空いたらしい。

「うん、帰ろう」

クミコはアカネを抱き取り、いとおしそうに頬ずりした。

「子供たち、あなたが気に入ったみたい。また指導してやってちょうだいね」と笑いながら立ち上がる。タカシは頷き、アカネに、またねと手を振った。底抜けの笑顔が、そこにあつた。

何度目かの「家路」のメロディーを聞きながら、足早に帰宅すると、猫たちが夕食にありついていていた。ダイフクと名づけられた黒の鉢割れ柄は、タカシの顔を見つけると、黒い鼻をひくつかせ目を細めて鳴いた。四つの足に白いソックスをはき、ベルベット状の艶やかな体毛を纏う。一足先に満腹になったダイフクは、トシコのそばに座り、丹念に毛繕いをはじめた。

ダウン症のアカネのことを思い出しながら、家族とは何かとタカシは考えた。生まれてきた赤ん坊は、障害の有無にかかわらず、慈愛を注ぐべき愛らしさだ。親にとって、それは自然な感情だろう。

障害によって人並みの発育をしないにしても、いつまでも赤ん坊のまま大きくなる我が子への愛情は、いささかも減ずることはない。アカネとクミコの親子を見ていて、そう感じた。

家族とは、心の中で常に寄り添い、一緒に暮らす者たちのことをいうのだと思った。腰を痛めたトシコを気遣い、取り囲む猫たちも家族の一員だ。タカシは、母と妹の暮らす安アパートに想いを馳せた。そこは、日常の退屈に紛れて、つい等閑にしがちだが、家庭のぬくもりを探れる、世界でたったひとつの特別な場所だった。

六

ダイフクとは「大福」という意味だ。この家に迷い込んで来たときは、まだ掌に乗るサイズだった。今や八歳の牡猫で、体重は八キロの巨漢だ。気儘で、生真面目な猫である。タカシがこの家に寝泊まりし始めて十日がたった今、警戒は解かれ、許容の眼差しが向けられる。

丸い手で器用に、襖を開けることができた。気が向くと、タカシの布団の隅で寝ている。昨夜うなされて目覚めたら、胸の上にとっかりと八キロの尻が乗っていた。けして媚びないが、機嫌のいいときに、艶やかな毛を撫でてやると喉を鳴らした。

正月も三が日を過ぎ、世の中は慌ただしさを取り戻しつつあった。タカシの周囲だけは、あいかわらず時間の流れが滞っている。茫洋とした感じが残っていた。

夕方からの寒波が勢いを増し、雪こそ降らないものの、冷蔵庫の底に沈み込むような夜を迎えた。未明に、運動会でビデオカメラを回す祖父の夢を見た。若き日のトシコの姿もある。タカシが幼稚園児の頃、一度だけ広島から四国を訪ねてくれたときの光景が蘇った。なぜ祖父の夢を見たのか、不思議だった。

祖父は第二次世界大戦で潜水艦に乗り、人間魚雷になり損ねたあと、この街の自動車メーカーで、定年まで勤め上げた。気儘な年金暮らしを楽しみ、数年前に肺癌で死んだ。子煩悩な好々爺だった。祖父を馬にして、一日中遊んだ記憶がある。顔もおぼろだが、祖父が幼いタカシに繰り返し伝えた言葉を、突然、何かの疼きのように思い出す。

「おまえのお母さんのことを頼む」と彼は、幼稚園児のタカシに何度も囁いた。なぜそんなことを言うのか、理解できなかった。自分たちの大切に育てた一人娘を、略奪同然に遠方の土地に連れ去った男の本性を、いち早く見抜いていたのかもしれない。

祖父と母のキミコは、じつは本当の親子ではなかった。母が四歳の時に、祖父母は結婚した。トシコの連れ子のキミコを、祖父は心

からかわいがった。トシコとの間に子供はもうけなかった。高度成長期の大企業の中にあつて、仕事人間として残業をこなす一方で、この団地に家を買ひ、一人娘を育て上げた。

その娘は一人の男と恋に落ち、その当時は海を越えるのに連絡船しかなく、丸一日かかる四国へ嫁ぐことを決意した。親を捨て去る覚悟さえあつた。何不自由ない家庭で育つたが、夫に惹かれたのは、どこか完全には満たされない父性への憧憬があつたのかもしれない、とキミコは独白したことがある。

キミコが夢見る家庭の青写真は、父の乱行によつて、まったく実現されないどころか見事に打ち砕かれた。それでも自分の両親の元に戻らなかつたのは、二人の子供を育てるのに必要な生活の糧を得るためだつた。母の姿が、ダウン症の子供を遅く育てるクミコのイメージに重なつた。

そのキミコが歳をとり、体調を崩し、元気を失つていく様子が気にかかる。幼い孫に、自分の娘の行く末を託した祖父の気がかりが、この家の中には、まだ残っている気がした。枕元の仏壇の遺骨が、その約束の履行を迫つて、かさかさとした声をたてたかに思えた。

タカシは、漠然と自分の人生の見通しを思いやり、己の無力を嘆くほどの気概もないことに辟易した。守るべき大切な人からの庇護を、いまだ必要としているならしなさに、目眩すら覚えた。

まだ明けやらない早朝の冷気で目を覚まし、足元のダイフクの姿を探した。タカシを見つめている視線に癒しを求めようとしたが、その姿はどこにもなかつた。

そのとき、窓の外で、つむじ風みたいな音がした。猫の唸り声とする。風を切り裂く口笛に似た音が、再び耳に届いた。ぎゃつ、という悲鳴を聞いた。

異変に気付いて、飛び起きた。素早くジャージを着込み、床の間に飾られていた模造の日本刀を手にした。部屋の灯りをつけないまま、音をたてずにサッシを引き、庭の様子を窺う。

縁側の上にダイフクがいた。タカシに気づかず、一心に毛づくろいしている。後ろ足に刺さった割り箸みたいなものを取ろうと、もがいているのだつた。再び、風切り音が目の前でおこつた。矢が庭の敷石を撃つ。ダイフクを狙っている何者かの存在を認めた。

模造刀を鞘から引き抜き、戸外に出た。闇に慣れた目で、矢の放たれた方向を見据える。闖入者の輪郭を認め、一気にその目の前に踊り出した。怒りで奔流するアドレナリンが、行動のすべてを支配している。

黒いジャンパーを着た若い男が、小さなボウガンを構えて、猫を狙っている。模造刀でそれをなぎ払つた。金属のかち合う激しい音とともに、男は尻餅をついた。呆氣にとられた顔で、見上げている。

眼鏡の奥の小さな瞳が、恐怖に収縮するのを見た。

血管を巡る憤怒の嵐が、刀を頭上高く振り上げさせた。男の眉間に叩きつけるイメージに捕らわれた瞬間、横から絞り出すような声がした。

「やめてくれ。頼む」

同じように黒づくめの男が立っている。そのしわがれた声には、聞き覚えがあった。打越の、ポマードでてるグレーのヘアが見えた。色つき眼鏡の奥の眼からは、その感情をうかがい知れない。両者に目をやりながら、刀を下ろし、成り行きを待った。

「息子のシンヤです。勘弁してください」

バイクで転倒したとき、目の前の家の二階から注がれた、不穏な視線を思い出した。

状況を飲み込めずに、立ち尽くしている。足元の若い男は、尻を地面につけたまま後じさり、払い落とされたボウガンを拾うと、弾けた独楽みたいに跳ね起きた。父親に肩をぶつけて、振り返りもしない。脱兎のごとく、駆け出して行った。

打越が近付いてきた。ゴミ袋らしきビニールを、手に提げている。

「息子がおかしくなってしまったのは、去年の夏くらいからでね」黒い顔の表情を動かさずに言った。口が動いているのかどうかかわからない。ひゅうひゅういう音が、枯れ枝のそよぎみたいな声に混ざる。

ダイフクは、足の矢をくわえ取り、傷を執拗になめている。タカシが近寄ろうとしたら、警戒を見せて身をかわした。びっこを引いているが、命に別状はなさそうだった。

闇の中に突っ立ったまま、打越はシンヤの話が続けた。タカシと偶然にも同じ年の息子は、祖父も勤めた大手自動車製造会社に、昨年の春まで期間労働者として働いていた。不景気のおおりで雇い止めにあってから、新しい就職先を見つけられなかった。彼は不器用で寡黙だったが、自動車が好きで、プラモデルを組み立てる延長のような仕事を、心底気に入っていた。ところが紙切れ一枚の通達で、翌日から来なくていいと、ティッシュペーパーみたいに使い捨てられた。

シンヤは、二階の自室に籠もる日が増えていった。食事に呼んでも、部屋から出てこないことが多くなった。何をしているのか、いつ寝ているのかも知れない。打越には為す術もなく、息子の落ち込みを眺めているしかなかった。

その夏の殺人的な暑さが、シンヤをさらに狂わせた。ハローワークに出かけた帰り、家に帰らず炎天下の公園のベンチに二時間も座っていた。熱射病の症状をきたし、通りかかった人が救急車を呼んで、病院に担ぎ込まれる騒ぎとなった。それ以来、昼間は、家から

一歩も出ようとしなない。

打越は、シンヤが緩慢な自殺を図ったのではないかと訝った。心が深く傷つき二つに折れてしまった息子が、列車に飛び込む勇氣はなくとも、照りつける太陽に体を差し出し、自ら死を選ぼうとしたのではないかと思った。自殺を繰り返さないか、いてもたってもいられない気分だった。気付かれないように、息子の監視を続けることにした。

秋になると、シンヤは夜中、家を抜け出し、近所の猫を殺してまわるようになった。ボウガンを携え、狩りを楽しむように、暗闇から猫を狙う。

打越は戦慄した。きたるべきものが来た、と思った。息子は手のつけられない怪物になって、自分の元を離れていった。あわててシンヤの中の魔物と、正面切って対峙しようとした。殴り合い掴み合って、自分の死を賭しても止めようと躍起になったこともある。

しかし、その努力は無駄どころか逆効果に終わった。時々発作的に、自傷を含む暴力を惹起するようになったからだ。その矛先は、打越よりも、体の弱い母親に向けられることが多かった。

打越の妻のマツは、強度のどもりだった。発声機能に器質的な欠陥があるわけではないが、学童期のどもりに対する級友からの虐めがトラウマとなって、まったく喋れなくなった。どうしても意思伝達が必要なときには、言葉をメモに書いた。打越と結婚したあと、シンヤが生まれてからあともずっと、その流儀は変わらなかった。

タカシが黙って聞いているせい、打越は胸のつかえを吐き出すように、思いつくままを一気に喋った。時々、苦しげに噎せて、しわがれ声をいっそう、しわぶかせる。中断させる術もなく、タカシはただ聞いていた。

今まで息子と、人間として向き合ったことが一度もなかった。口のきけない妻に子育てを任せっきりで、今まで自分は何一つかわらうとしてこなかった。その放任の鬱積を、いきなりしっぺ返しされた気がした。どうしたらよいのか途方に暮れている、と打越は言葉を詰まらせた。

とりあえず彼は、シンヤが殺した猫を拾い集めて回ることにした。矢の突き刺さった死骸を、そのまま放置するわけにはいかなかった。多い時では一晩に五匹もの骸を集めて、近所の人間に気付かれないように、こっそりと保健所に持って行った。しばらくして、自分が猫を殺していると噂がたっていることを知ったが、息子が疑われるよりましだった。

「何もかもが狂ってしまった」と打越は表情のない顔で話した。ダイフクは、どこかへ姿を隠していた。

砂利の上に落ちていているファイバー製の矢をつまみ上げた。シンヤ

に対する怒りがこみ上げてきた。同じような目にあつた者はここにもいる、と言いたかつた。

「話はだいたいわかつたけど、あんたの息子にはまだ謝つて貰つてない」とタカシは、模造刀を鞘に仕舞いながら、やるせなさを口にした。

「家族同然の猫なんだ。名前はダイフクっていう。死んでたら謝るだけじゃ済まされないところだつた」

「申し訳ありません」

打越は突然、膝を突いて、目の前に土下座した。タカシの怒りをかわすためのパフォーマンスなのか、判断しかねた。

「やめてくださいよ。そんなことされたつて。とにかく息子さんに会わせてもらえませんか？」

タカシが促すと、打越は土を払いもせず力無く立ち上がり、「ええ、会つてやつてください。自宅に帰つているかもしれませんが。今から一緒に来ていただけますか？」と頼んだ。

深い夜は、まだ当分続きそうだった。寒さを忘れ、薄着で立ち尽くしている。血液の温度が、低下したように思えた。タカシは家の中に入って、炬燵の中に隠れたダイフクの様子を確かめた。傷は毛に覆われて見えない。出血も止まっているらしい。

ダウンジャケットを羽織り、スニーカーを引っかけ、もう一度窓から外に飛び出した。耳の遠い二階のトシコが起き出してくる気配はなかつた。打越は庭から出て、家の玄関で待つていた。

「お願いします」と頭を下げる彼の後ろについて、猫殺しの青年を探しに出かけた。

七

打越の自宅は、大きな二階建ての洋館で、昔、彼が競艇の仕事をして儲けたときに建てたものだという。その後、彼の事業の失敗により残つたのは家だけで、老夫婦は一人息子と一緒に、爪に火をともしず年金暮らしなのだ、と町内会長の島田が話していたのを思い出した。

「さあ、どうぞ、むさ苦しいところですけど」

促されるまま靴を脱ぎ、大理石張りの広い玄関から、廊下が上がつた。いかにも金のかかつた調度が並んでいるが、そのどれもが古めかしい。上質な床のフローリングの表面には、白い埃が薄く溜まっている。

広さが災いしてか、戸外と同じくらい冷え切つていた。火の気のないうすら寒い家の空気は、古びた納屋のにおいがした。人の営みにまつわる生活感が、ここにはまったく存在しない。

「とりあえず、こちらへどうぞ」

打越に招き入れられたのは、豪勢なシャンデリアの吊り下がったりビングだった。イタリヤ製とおぼしき、鞣し革のソファに掛けさせられる。小柄な枯れ枝のような女性が、紅茶茶碗を盆に載せて現れた。口をきかない打越の妻のマツだった。

「まあ、お茶でも飲んで暖まってください。シンヤは先ほど帰ってきて、二階にいるそうです。落ち着いたら私が、事を納得させて連れて下ります。きつと謝罪させますから」と言い、妻と一緒に、向かいのソファに腰を下ろした。

ここにも暖房器具はない。半分しか灯っていないシャンデリアが、広い部屋の壁をぼんやりと照らしている。大きなフランス人形のガラスケースが、いくつも並んでいる。赤や青の派手なレースの衣装を纏う人形が、この家の無機質さを、さらに強調していた。

底冷えのする寒さが、足元から這い上ってくる。紅茶はいつ煎れたかと思うほどぬるく、なんだか黴臭い味がした。目の前に鎮座している老夫婦は、映画の化け物屋敷の主たちのように重力を感じさせない。盛り上がったカツラに、色黒の分厚い仮面を着けた打越と、洋装のミイラにしか見えないマツの姿は、タカシを落ち着かない気持ちにさせた。

「シンヤがあんなことをするようになったのには、子供の頃からのいくつかの出来事が関係していると思います」

打越は、マツの顔をちらりと見た。

「シンヤが生まれたとき、天から宝を授かったと私たちは狂喜しました。とくにマツは自分が子供を持てたことに、驚きと至福を感じていました」

マツは本当に自分が産んだのだと念を押すように頷いた。手元のメモ用紙に鉛筆を走らせ、タカシの目の前に差し出す。

『いとおいしい自分の分身だと思いました』と書かれていた。落ち窪んだ小さな瞳が、脈打つ感情に揺らいでいる。

「口数の少ない、本当におとなしい小学生でした。それはマツの影響でした。どもりにまつわる苛めを怖れていました。筆談するしかない母親の苦しさを、子供の頃から眺めているうち、いつか自分もどもりに取り憑かれるのではという強迫観念が、他人に話しかける勇気を削いだのです。友達もできませんでした。その代わりに、小鳥の飼育に熱中するようになりました。生まれたばかりのインコの雛に餌づけして、手乗りに育てるのです。インコは、雛の頃から教え込んでいくと、いくつかの言葉を喋ります。それに没頭しているようでした」

打越は仮面の口元を、腹話術のようにわずかに動かし続けた。しわがれた声が、寒々とした広い天井に響く。大きい色つき眼鏡に、眼

の動きは隠されている。からくり仕掛けの置物みたいに、隣のマツが時々、頷いた。

「やがて、小鳥との世界に埋没していたシンヤにとって、シヨツクな出来事がありました。育てていた小鳥を、一夜のうちにすべて惨殺されたのです。窓の隙間から忍び込んだ、野良猫の仕業でした。目覚めてベッドから下りたとき、素足でなにか小さな柔らかいものを踏んだと思ったら、喰いちぎられたインコの頭だったそうです。シンヤが教えた、おはようとかこんにちはとかを、喋りはじめたばかりの鳥でした。布団の上には血と羽毛が飛び散り、壊れた鳥かごが転がっています。こんな騒ぎの中、なぜ目が覚めなかったのか、とシンヤは自分を責めました。見殺しにした、と思い込みました。愛する小鳥たちが無惨にも喰い殺されている間中、安楽な睡眠を貪り、夢ひとつみることにはなかつたのですから。惨殺者はのうのうと姿を消していました。あの子の潜在的な猫への憎しみは、それに根ざすものかもしれませぬ」

狭窄した気管を絞るような声で、打越は話した。

「それ以来、シンヤは小鳥を飼育することをやめました。何者とも深く関わることを避けているように見えました。言葉というものに、強い執着というか、こだわりを持った子供でした。それが、同年代の子供との交流を阻みました」

彼にとつて、はじめての友人ができたのは、中学校に上がってすぐのことだった。この家に遊びに連れて来るようになった。友人の名は、小栗ヒサシといった。耳の大きい猿みたいな風貌の小柄な少年だった。シンヤが友達を作ること、もはや諦めていた打越たちは素直に喜んだが、当惑することがあった、と話を続けた。

「ヒサシ君は、強いどもりだったんです。彼が会話をしようとして、実際に言葉が出てくるまで、長い時間が必要でした。喋りはじめても、赤ん坊の歩行みたいに、すぐにつっかえて進みません。マツはこれが原因で幼少の頃に苛められ、一言も喋らなくなつたのです。ヒサシ君が苛められていたかどうかはわかりませんが、似たような環境にあったことは、容易に想像できました」

マツがメモ用紙に何か書き付けた。

『どもりは、本当に苦しいことです』とあった。皺の多い顔を、さらに歪めて見せる。タカシは何も答えず、座っていた。

「ヒサシ君との間に、どのような友情が成立していたのかわかりませんが、二人は心を許し合っているように見えました。シンヤはどもりの親友に、強い愛着と興味を抱いていました。かつて猫に殺されたインコに、言葉を教え込んだと同じ熱心さを持って、ヒサシ君の喋りを分析し、治療しようと躍起になっていようでした。自分の部屋の椅子に彼を座らせ、向かい合って会話らしきものを試みて

います。彼の発声をつぶさに観察して、いろいろな喋り方を練習させました。ヒサシ君も嫌がることなく、それを受け入れていきます。彼自身も何かを期待して、シンヤに付き合っていたのだと思います。」そんな奇妙な関係でも、親にとってはおうれいことだった、と打越は言い、同意を求めようとマツを見た。

しかし、同時に深い危惧を抱いた。息子と親友の背後には、大きな落とし穴が暗い大きな口を開けて待ちかまえている気がした。その予感、日増しに大きくなっていった、と付け加えた。

マツがふと立ち上がり、空になったタカシの茶碗を取り上げ、リビングを出て行った。それにかまわず、打越は述懐を続けた。

「とうとうシンヤが二年生の春に、大きな事件が起こりました。ヒサシ君とは、いつも一緒でした。ある土曜日の下校時、本屋にでも行こうかと近道の裏門を出たところで、学校でも札付きの悪童にかまったのです。相手は同じ学年の四人組で、それまでもたびたび、ヒサシ君のどもりを、からかいの対象にしてきた連中です。暇持てあましていた彼らは、シンヤの目の前で、ヒサシ君に絡み始めました。暴力を怖れて、シンヤは嵐が過ぎ去ってくれるのを傍観するだけでした。四人組の行為は、しだいにエスカレートしていきます。体育館の用具室に、二人は連れて行かれました。ここでヒサシ君は、体操用のマットにぐるぐる巻きにされて、タックルされたり蹴られたりしました。シンヤも悪の一人から、寝技や関節技で締め上げられ、ヒサシ君を助けるどころではなかったのです。二時間もそんな虐めが続きました。ヒサシ君の異常に気付いてやっと、それは止まりました。マットの中でぐったりし、息をしていなかったのです。」マツが入れ替えた紅茶を運んできて、無言でタカシの目の前に置いた。どうぞ、と打越は話の腰を折りながら、手を動かした。勧められるまま、タカシはカップに口を付けた。わざとそうしているのか、白湯よりもぬるい紅茶は、先ほどとは味が違って、藁を煮出したような渋さだった。

「ヒサシ君は、救急車で運ばれた病院で、息を引き取りました。死因は窒息死です。ヒサシ君はお父さんを病気で早くに亡くし、清掃婦をするお母さんと二人暮らしでした。警察は苛めた四人から、話を聞きました。シンヤも一緒です。警察署に全員の親が呼ばれ、夜遅くまで、事情聴取がなされました。初めのうち、罪悪感を覚えた悪童の一人が、虐めがあったことを白状し、事実通りに処理されそうに見えました。」

ここからあとの出来事が、シンヤの心を大きく傷つけた、と打越は顔を歪めた。

「警察官に質問され、シンヤは起こったことの詳細をありのままに話しました。相手もヒサシ君に同情を見せながら、熱心に調書を取

ったそうです。ところが、翌日になって事実は大きくねじ曲げられた形で公表されました。虐めがあったことが、まったく伏せられており、仲のよかった友達同士で、プロレスごっこをしていたところ、打ち所が悪かったヒサシ君が不幸にも亡くなったというものでした。悪童四人組の親は、地元の県会議員や医者、弁護士といった名士ばかりでした。親の力で息子の悪事を隠蔽し、都合のよいように脚色してしまっただけです。シンヤもその仲間の一人とされ、放課後のクラブ活動での事故だ、と記されています。悪童たちのよからぬ噂は、町でも有名だったため、虐めの存在を確信した週刊誌の記者たちが、関係者の自宅に押し寄せました。学校は、虐めの事実はなかったと否定し続け、清掃婦の母親が勇気を振り絞って起こした裁判は、長く続きました。悪童たちの親たちは、学校、警察、裁判所、ありとあらゆるコネを利用して、圧力をかけました。自分の権力とお金を湯水のごとくに使い、もみ消しに動きまわりました。その結果、誰もお咎めなしのまま、時間の経過とともに忘れ去られていきました。シンヤは、沈黙を守りました。警察官に本当のことを話したのに、まったく捏造された経緯にすり替えられてしまった不信感が、彼の口を固く閉ざしたのです」

小鳥を殺された時と同じように、シンヤはまたしても自分の責任であるかのように思い込んだ、と打越は悔しがった。

「私たちにも責任があるのです。悪童たちの親の一人は土建屋上がりの県会議員で、当時競艇関係の仕事で潤っていた私にも、執拗な圧力をかけてきました。シンヤが自分の息子に不利な証言をしないように、あからさまな飴と鞭をちらつかせて、迫ってきたのです。愚かにも、その脅しに屈してしまいました。私たちは、最初ヒサシくんの哀れなお母さんに同情して、裁判での戦いに協力する約束をしていました。それを、シンヤの沈黙をいいことに、完全に無視したのです。やがて事件は、誰からも忘れ去られていきました。無理矢理、風化させられたのです」

ウソはつかなかったが、本当のことも言わなかった、と打越は苦しそうに話した。ヒサシ君の母親と、最後に話したときの怨嗟と諦めに満ちたあの眼を忘れることができない、と首を振った。

「シンヤは、口をきかなくなりました。私たちの悪意を憎んでいるようでした。それは、ヒサシ君の死を止められなかっただけでなく、真相を葬るのに荷担さえした自責の念と重なり、深い絶望感に捕らわれたのだと思います」

マツがメモ用紙をとりだした。『私たちは本当に馬鹿者だった』と書かれている。あのときに息子の代弁者として、ヒサシ君のために戦うべきだったのだ、と打越が彼女の気持を口にした。

「家族にとって、砂を噛むような年月が過ぎました。シンヤはそれ

でも一度だけ、立ち直りのきっかけを求めて、この町の大手自動車メーカーに期間労働者として就職しました。機械部品とだけ向き合う寡黙な作業が気に入ったと見えて、長いトンネルを抜け出せそうな希望を紡いでいるようでした。それが、金融危機だとかの影響で突然打ち切りになってしまつて。それ以来、他に仕事を見つけないこともできません。部屋に籠もることが多くなつて、何をしているのか、私には見当が付きません」

マツが鉛筆を動かした。『インターネット』と怒りを込めて殴り書きしている。

「インターネットだと、口をきかずに会話できるからでしょう。顔も知らない大勢の仲間とやりとりして、一晩中起きているのです。誰と何を通信しているのやら。夜中、家を抜け出して、おかしな行動に走り始めたのは最近のことです」

肩を落として深い疲れを見せた。二階の物音に耳を澄ましたが、窓を揺らす戸外の風の騒ぎ以外には、足音ひとつ聞こえない。

「シンヤ君と話をさせてもらつていいですか？」

タカシは彼の顔を見たいと思つた。同じ歳の男の心の中に、どんな魔物が巣くうようになったのか、確かめてみたかつた。

「私が先に、あなたが来られていることを知らせてきます。うまくいけば連れて下りますので、ぜひ会つてみてください。すこし、お待ちいただけますか？」

色つき眼鏡を指先で押し上げ、意を決したように立ち上がる。マツが心配そうな顔で見送つた。

「大丈夫です」と打越は自分に言い聞かせるように手を上げ、緊張した面持ちで、二階への階段を上りはじめた。

八

シンヤの部屋に入る気配がしたが、話す声も足音もしない。マツが表情のない顔で、タカシを瞬きもせず見つめている。間が持たなくなつて、タカシは携帯の画面を眺めた。何の着信もなかつた。

『シンヤをぜひ救つてやってください』不意にマツはメモを見せる。『私たちにできることは、なにもありません』と続いた。自分でできることがあるだろうか、勢いで関わりを求めたことを、いささか後悔し始めていた。

突然、沈黙を破る轟音が響いた。ごとりと重量物が転がる鈍い音がした。マツが弾かれたように立ち上がる。リスみたいな身のこなしで、二階へ向かう。タカシもそれに続いて、階段を駆け上がった。

一枚板の重いドアが蝶番で外れ、廊下側に倒れている。その上に打越が仰向けになり、手足を痙攣させながら呻いていた。部屋の中

から、強烈な力で蹴り出されたようだ。

「大丈夫ですか？」

背中を抱え起こすと、頬を膨らませて息を吹き返した。

「シンヤを止めてやってくれ」と唾を飛ばして言う。タカシは部屋の中に入って、その姿を探した。

びょうびょうと、乾いた寒風が部屋の中に吹き込み、千切れんばかりにカーテンを揺らしている。シンヤは窓から屋根を伝って、まだ明けやらぬ夜の中に、再び跳梁していった。

『魔物が取り憑いた』とマツが震える腕でメモを出した。シンヤはコウモリのように、いつも窓から出入りする。

「また猫を殺しに行ったのか？」

ぼっかりと開いた窓の前に、立ち尽くした。シンヤの気配は、すでに遠ざかってしまった。荒涼とした闇のざらつきが、タカシを捉えた。背筋を寒くしながら、彼を貫く狂気を思いやった。ポウガンを抱え、獲物を探して闇夜を走る彼の魂は、いったい何を求めて彷徨うのだろう。魔物のせいにする、マツの気持ちかわかる気がした。

部屋の隅には勉強机があって、その上に開いたパソコンがある。電源が入ったままになっていた。打越に暴力を振るう直前まで、彼が向かっていたはずの画面に引き込まれた。

「彼が何を見ていたか、覗いてもいいですか？」

打越の許しを得て、タカシはパソコンの前に座った。マウスを操作し、ずらずらと並ぶメールを盗み見た。シンヤはブログを書いている。幾多の写真やメッセージが並んでいる。そこには無数の情報が、うっそうとした混沌の深淵に打ち捨てられていた。

《猫殺しの憂鬱日記》と題されたそのブログはシンヤが、毎夜書き綴ったものらしい。

《殺される側と殺す側の違いは、生まれたときから歴然としている。弱者を守れなんて、殺す側の玉座にいる者が叫ぶ姿は、見ている本当にムカつく。馬鹿げているし、虚しいだけだ》

《僕は猫を殺す。猫は言葉を持つとうとする者を虐げるからです。言葉を持つ者が、持たない者を支配する世の中です。猫は支配者の手先として、支配を逃れようとする者を、消しに来るのです。殺される前に殺せです》

《猫を殺すのは簡単です。僕はこの武器を使います。声もたてさせずに、一瞬で息の根を止めることができます》

《今夜の戦果はこれです。一歳未満の野良の牡猫で、目の横の縞模様の特徴があります。すばしこいので、けっこう手こずりました。

でも今は、しっかりと死んでます》

携帯で撮影したと見られる残酷な写真が並んでいる。血まみれの猫の首を、ポウガンの矢が貫いていた。

《僕のことを狂っていると誰もが言うでしょうね。実際、自分でも強迫神経症にでもかかっているのではと思います。殺される前に殺さなくては、という絶え間ない恐怖感に苛まれています》

《僕はやっと喋りはじめたインコです。かわいい小鳥の首を千切りに、猫がやってくるので、無慈悲な爪にかかる前に、やつつけなくては》

《今夜は大漁です。五匹も始末しました。首輪のついたどこかの家の飼い猫もいますが、知ったこっちゃありません。死骸は放置してありますが、ばれる心配はありません》

《頭痛です。今夜もひどい頭痛がします。狩りは諦めて、寝ます》
《また頭痛です。猫の祟りでしょうか？頭痛薬を大量に飲んだら、なんだか、視界がぐらぐらしてきました。このまま死んでしまうかもしれません。もし死んだら、伝説の男になれるでしょうか？》

《狩りに出ることができました。でも、猫がいません。また頭痛がして、苦しいです。》

《ブログを見た人からメールがありました。その人も僕の行動に賛同してくれて、自分は犬を殺すと言っていました》

《猫を殺すと、いくぶん頭痛が和らぎます。孫悟空の頭の輪っかみたいなものですか？》

《今夜は、とても気分がいい。狩りに出ます》

《飼っていたフェレットを苛めて殺した人からメールあり。イタチの最後っ屁にやられたそうな（笑）》

《二匹殺りました。猫を殺すのは、誰にも負けません。プロの仕事です》

バスタブの写真、大漁の血、猫の死体、DVD、猫の体の一部、工具やナイフ、鮮明な写真が並んでいる。どこかで殺した猫を自宅に持ち帰ったことがあるのか、嫌な気がしてこの部屋にその痕跡を探した。タカシの肩越しに、打越がパソコンの画面を見ていた。息子が狂気に落ちた証拠を眺めて、顔色ひとつ変えずにいる。

《博多のS氏からメール。レトリバーを撲殺したとのこと。証拠写真もあり。でかい獲物に少々興奮気味》

《鎮痛薬の飲み過ぎで、朝からふらふらしています。仕事人の服を身につけてみましたが、今夜は狩りに出るのは無理みたいです。誰か僕の代わりに猫を殺してください》

《雪です。滑らないように屋根を歩くのは大変です。猫の姿はありません。虚しいです。どこに隠れているのか、誰か教えてください》

胸の中が、吐き気を催す酸っぱいもので満たされ、タカシはパソコンに向かっていられなくなった。打越に椅子を代わり、開け放たれた窓から外を見た。待ちわびた朝の気配が、やっと冷気の中に混ざり込む。漆黒の闇が、灰色に薄まっている。

『シンヤのこと警察に言いますか？』マツがそばに来て、メモを出した。打越はまだパソコンの画面を見ている。

「庇う気持ちばかりですが、彼はとても危険な状態にいると思います。猫殺しの次は、小さな子供を狙ったりするかもしれません」タカシはダウン症のアカネを思い浮かべた。すべすべした子供の皮膚を、ボウガンの矢が何の抵抗もなく貫通するシーンを想像する。「わかってはいる。ただ、もうしばらく猶予をもらえないだろうか？」しわがれた声を絞り出し、打越が言った。

「もう一度だけ、シンヤと話したい。精神の迷路にいる息子を助け出したい。警察にできる仕事ではない」

一人息子に向ける父親の気持ちがあつた。その発露の仕方が正しいとは思えない。猫の死骸を拾い集めて歩く彼の行為は、常軌を逸している。シンヤの中に渦巻く狂気が、打越にも伝染し、すべてをのみ込もうとしていた。

「息子さんは、あなたを利用していません。後始末をさせられるだけだと思えます」

「私のことを恨んでいるのだと思う。彼のために何もしてこなかった。それどころか、ウソをついて大切なものを奪った」

苦しげに呻く。マツが傍らに立って、肩にそっと手を置いた。親子ともに自分を責め、それによって苛立ち、息子と同様に正気を失いつつあつた。

「とにかく、猫を殺すのをやめさせてください。もしなければ、彼は自分自身を殺すことになると思います」

窓の外に朝靄が降りるのを見た。ゆっくりと長かった夜が去つていく。しらじらと日の光が差し込み、跳梁跋扈した魔物の時間を終わらせた。タカシは礼を言つて、打越家を辞去した。

庭の窓から戻つたタカシを、トシコは不思議そうな顔で見たが、何も言わずに仏壇の前で手を合わせた。矢傷を受けたダイフクは、炬燵の下で丸くなっている。背中に触れると、眠そうな眼をしばたかせた。毛に隠れて傷も見えない。安堵と同時に、やっと現実の世界に舞い戻った気がした。

九

その日、トシコは聴力を完全に失った。島田に勧められて行った整骨院での針治療が原因らしい。腰痛を治すため、背中に幾本かの針が刺されたとき、なぜか耳の奥で、がりがりと音がした。不審に思ったが、そのまま我慢した。帰りの道すがら、聴力が完全に失われていることに気付いた。整骨院に引き返して、そのことを伝えただが、針治療とは関係ないと取り合ってもらえなかった。聞こえなく

なった耳をほじくりながら、敏子は悄然と帰ってきた。

行きつけの耳鼻科では、原因不明の突発性難聴と言われた。もともと耳は遠かったが、補聴器の助けを借りて、なんとか凌いできた。音を完全に失った世界に暮らす不安が、彼女を打ちのめした。どうせ話する相手もないし、とトシコは涙目を拭い、苦笑いを浮かべながら猫の背中を撫でた。

タカシは事態をキミコに伝えようと、携帯に電話したが繋がらなかった。その夜になって、サトミから電話があつた。

「久しぶりね。様子はどう？」

面白くもないといった口調で、妹は聞いた。

「ばあちゃんも耳が完全に聞こえなくなった。もうしばらくこっちにしようかと思うんだけど、そっちは？」

「お母さんの具合があまり良くないの。今日も病院に付き添ってきたんだけど、お医者さんが言うには、やっぱり甲状腺の癌だつて」鼓膜が緊張し、「癌」というひと文字が氷の刃となって胸に突き刺さる。返事ができずにいるタカシにかまわず、サトミはつとめて冷静に話を続けた。

「もう少し検査をしてから、できるだけ早うちに手術をした方がよさそうだって」

「本人はそのことを知っているのか？」

「知っているわ。隠しようもないし、告知を本人も強く望んだから。」

私は横で聞いていただけ」

「大丈夫か？母さん」

タカシは喉をこわばらせながら聞いた。

「シヨックだったのは間違いない。帰宅してから部屋で泣いていたもの。私には、何もできない」

サトミの声が、涙で濡れていく。

「どうしたらいいの？ねえタカシ、考えてよ」

「こちらが落ち着きしだい、そっちに帰るよ」

「今すぐに、そうして欲しい。お母さん、仕事に行くってきかないのよ。これ以上、休めないからって」

「わかった。できるだけ頼む。おまえも学校は行けよな」

「私の学校なんて、もうどうでもいいよ。大学進学もやめる」

「よくない。あわてるな。どうにかなる」

「どうなるわけ？どうにもならないよ。わたしたちのお母さんだよ」受話器の中が嵐になった。なだめることもできずに、タカシは言葉を失う。

「そっちに帰ったら、ゆっくり話そう。頼むからしっかりしてくれ」返事のないまま、頷く気配とともに電話は切れた。湿った電子音だけが耳に続いている。母の体の中で増殖する癌細胞を想像し、いた

たまれない気持ちになった。

仕事を失い、何の特技も蓄えもない自分の無力さを呪った。ダメ男の遺伝子を、体中の細胞から駆逐したかった。アルバイトや派遣で定職に就かずにいたのも、仕事を転々とした父のようになるのが恐かったからだ。仕事にめどが立ち、一方で自由を失った途端、何が嫌になる父の性質が顔を出すのを怖れていた。それに向き合おうとせず、逃げ回ってきたことのツケが回ってきた。タカシは、深い羞恥に自分の心を染めた。

聴力を失ったトシコは、携帯でのやりとりを理解できずに、テレビの画面を見つめている。どうかしたか、と目を向けたが、首を振るタカシを認めて、意味もなく微笑んだ。

気が付くと、テーブルの上にタカシ宛の分厚い封書が置かれてあった。本村ナオコからの手紙だった。あわてて封を切り、三つ折りした便箋の束を開いた。見覚えのある青いインクの文字が、びっしりと並んでいる。周囲の物音をすっかりフェイドアウトさせて、タカシはその長い手紙を、一気に読み通した。

『前略

突然のお便りでごめんなさい。うまく話せそうにないので手紙を書くことにしました。どうか不躰をお許しくださり、寛容な心でお読みください。お願いします。

あなたはいつか、人は一人で生まれてきて、一人分の孤独を背負い、その人なりに懸命に生きて、そしてまた一人で死んでいくものだとおっしゃいました。私もまた、そのとおりの生き方をしてきました。女の身でありながら、そんな考えを抱くようになったのは、筋ジストロフィーという難病にかかって、高校生の頃に亡くなった、私の兄の死が影響していると思われます。この話を他人にするのは、はじめてのことです。

それは体中の筋肉組織とともに、運動機能を少しずつ失いながら、最後には呼吸もできなくなって死に至る、本当に恐ろしい病気でした。私はそのときなぜか、兄が私の身代わりになったような気がしました。原因不明の業病にとりつかれるはずだったのは、本来自分であったはずなのに、何かの間違いで兄が貧乏クジを引いてくれたと感じました。病気になる前の兄は、引っ込み思案で目立たない私とは正反対の、元気に満ちあふれた利発そのものの子供でした。

跡取り息子の病気が不治の病だとわかったときの、両親のがっかりした顔を、今でもはつきりと思い出します。とくに父の落胆ぶりは顕著でした。沈んだ父の顔を見て、病気になったのが私の方だったらよかったのにと、言葉に出さないけれども思っている、幼い私は勝手にそう信じ込みました。被害妄想に近いその僻みを理解し、否定してくれる人は誰もいませんでした。

兄は病気になってからも、同情という形で両親の愛を、介護という形で両親の時間を、すべて私から奪いました。それを妬み、密かに兄の早い死を望んだほどでした。心の中で兄を憎み、その死を望んでいる事実は誰にも知られてはいけな、知られたら両親からもっと愛されなくなる、ねじ曲がった精神状態が、私を押し潰そうとしました。ほとんど口をきかない、おとなしい子として育ちました。家族にとっても、本当に長い闘病生活が続きました。十年以上に及ぶ、病人を中心にした生活は、何もかもを疲弊させ、全員の感情を少しずつすり減らし、苛立たせていきます。兄は入院を繰り返したあと、とうとう寝たきりになって、病院のベッドから起きあがれなくなりました。

そんなある日、私は友人とのちょっとした遊びに夢中になって、見舞いに行くはずだった約束を忘れてしまいました。その日は、兄の誕生日だったので。病室でそれを祝うための準備が、出来上がっていました。父は遅れてきた私を部屋の外に呼んで、こつぴどく叱りました。その激昂ぶりは、私を脅えさせ、私だったらよかったのにと、父が思っているのではないかという子供の頃からの疑念を、確信に変えるに十分でした。悲しみと妬みが、さらに兄を憎む気持ちとなって沸き立ちました。兄の死を望み、寝る前に呪詛の言葉を口にするほどでした。

果たして私の望み通りに、兄の病状は着実に悪化していきます。ある時、両親が主治医と話すために部屋を出たのを見計らい、兄は私の手を握って、自分の分までしっかりと生きて欲しい、と言いました。つまらない僻みから、私が兄のことを心の中で憎んでいることなど、微塵も疑っていないのです。私と遊んだわずかな記憶を、ことさらに貴重な思い出として語り、ありがとうとさえ言いました。兄は私のことを、たった一人の妹として、本当に愛してくれていたのです。そのことをはじめて理解したとき、大きな間違いをしかしたことに、やっと気付きました。兄を殺そうとしている自分の邪な心を恥じました。

兄は消え入りそうな声で、両親のことを頼む、と付け加えました。中学生だった私は、できそうにないと言って、兄の痩せ細った手を払いのけ、枕元で泣きました。すまない、僕が悪い、と彼は自分を責めました。ちがう、ちがうと私はますます混乱して泣き喚きました。私は自分自身が許せずに、よほど病室の窓から飛び降りて死ぬかと思っただけです。

彼はそれから、ひと月もたたないうちに、自分の不運を呪うこともせず、すっかり覚悟ができていたのでしよう、私たち家族への感謝と謝罪の気持ちを口にしながら、静かに息を引き取りました。私がつっぱかした日が、兄にとっては最後の誕生日だったので。父

が怒ったのは、それを予期していたからかもしれません。

私の胸の中には、鉛のように重い後悔が沈んでいます。兄を殺したのは私だ、と思いました。そして兄の口にした言葉が、私を身動きできないように縛り付けていました。

彼の分まで生きるといったって、はたしてどんな生き方をすればよいのでしょうか？自分にどんな生き方があるのかさえ、まともに考えたことはありませんでした。悪魔に魂を売り渡した報いを受けているのだと思います。

抜け殻のようになって県外の大学に進学し、就職のために両親の近くに帰ってきました。誰にも頼らず、とりあえず自分一人で生きていくことができるようになりたい、と一人暮らしを始めました。両親はなぜそんなことをするのかと訝しみましたが、兄の言った、しっかりと生きるということは、まず自活できることだと勝手に解釈しました。中途半端な、ママゴトみたいな発想です。

事務職でしたが何年か勤めるうち、将来このまま一人で生きていけない自信も身に付いてきました。独り身の自由も、けっこう悪くないものになりました。結婚なんかする必要はないと考え、あなたも知っているカタツムリの飼育を始めました。両親は結婚を強く勧め、強力に見合させようとしましたが、私はすべて無視しました。兄には、一人分の孤独はしっかりと背負って、きちんと生きていくから、と心の中で理解を求めました。

いつまでもそんな暮らしが続いていくものと安心しかけていた頃、あなたと出会いました。誰かと恋に落ちるといったことは、私にとっては、想定外の初めての経験でした。

二人でいることの心地良さに、つい溺れそうになりました。分不相応な期待を抱いてしまったのです。あなたを両親に会わせようとしたことも、自分でも信じられない心境の変化でした。あなたが派遣切りにあつて、その面会をキャンセルしてきたとき、私の心の中に変な波が立つのに愕然としました。あなたの中の私が、私の想い以上の存在でありたいとの身勝手な熱望、執着、それが叶えられない予感への怖れ、僻み、嫉妬、さまざまな負の感情が汚水のように、足元から湧いて出ました。

急激な気持ちの動きに翻弄され、戸惑いました。理解しにくいかもしれないませんが、これはかつて兄が難病にかかったとき、兄より私ならよかったのにと父が考えている、そう思い込んだ時の気持ちの揺らぎとそっくりなものでした。同じ過ちを繰り返そうとしているとの猜疑に打ちのめされながら、一人、この正月を過ぎました。

あなたが私との未来を、どう考えているのか、わかりません。あなたの心の中には、いつも秘めた引け目のようなものがあると感じました。それと一人で闘っているように見えます。いつも控えめに

他人に接する仕草には、抱え込んだ寂しさの分だけ優しさが滲んでいます。あなたに惹かれた理由のひとつでもあるのです。貝殻の片割れが覆い隠す深い孤独を、二枚合わさることで、緊密に封じ込めることができるかもしれない、と勝手に想像して期待を募らせてしまったのです。

私はあのクリスマス夜の夜以後、深い自己嫌悪に陥りました。そして、本来一人で生きていこうと決心していたことを思い出し、一度、あなたとは距離を置きたいと考えるようになりました。一方的な申し出で、大変申し訳ありません。あなたの気持ちを思いやる余裕すらないことを、どうかお許しください。

今現在、思いつくことを気儘に書いてしまいました。もう少し、自分の気持ちに整理がついたら、今一度お会いしたいと思います。では、相変わらずの寒さの折、お体ご自愛なされますよう、心からご多幸をお祈りしております。

草々』

長い手紙を読み終えたとき、タカシは胸の内にしだいに広がる苦い喪失感を味わった。結婚という、かつて意識してなかった関係性の変化を、タカシとの間に夢見始めてから、自分が自分でなくなつた、と本村ナオコは正直に書いていた。それをきっかけに、もう一度自分の生き方をきちんと見直したい、と考えている。

ナオコの心の中を、はじめてつぶさに見た気がした。自分といえ、彼女との生活を夢想するだけで、お互いの心を開き、内面の襞で絡み合おうとするほどの誠実さはなかった。恋愛とは、そしてその帰結として当然あるべき結婚とはそういうものだ、と彼女は言っている。追いつめられた言葉が、タカシに向かって吐露される前に、その兆候を読み取り、真摯な気持ちで彼女を包むことができたはずだった。

ナオコの手紙を手元に置いたまま、腑抜けのように、いつまでもキツチンの椅子に座っていた。本当に大切なものが、両手の指の間から、するりと抜け出していった。

「あんた、一度家に帰った方がええんじゃない？」

トシコが来て、言った。聴覚を失ったものの、腰の痛みは少し楽になってきたらしい。洗濯や掃除などの家事も、緩慢な動作ながら自分でできるようになっていた。

「来週、帰るよ。向こうが落ち着いたら、またこっちに来るから」
「うちのことなら気にしてくれんでもええけね、猫もおるし」
トシコは、皺を寄せて笑った。

残された三日間で、タカシはできることをすべてした。買い置きできる食料をまとめ買いし、倉庫の中に取り出しやすいよう整理して置いた。家中をくまなく掃除し、庭の植木を刈り、生い茂った雑

草を抜く。布団を干し、ゴミをまとめて収集所に出す。猫のトイレを洗い、寝床を片付けた。汚れた窓ガラスも全部拭いた。

「ありがたいねえ」

トシコは猫たちと縁側に腰掛け、小春日和の陽差しを浴びながら、タカシの仕事ぶりを、うれしそうに眺めていた。

翌日、事件は起こった。早朝の坂道を、救急車のけたたましい叫びが駆け回り、すぐさまパトカーも、それに続いた。タカシの眠りを妨げるほどの騒ぎだった。早起きのトシコが気付いて、霜の降り敷いた戸外に出てみた。

「打越さんの家で、何があったんじやろう？」

三匹の猫たちを従えて、二階建ての洋館の前まで歩いた。

打越と息子のシンヤが、担架に乗せられ運び出されていくのを見た。二人とも、頭から赤いペンキを被ったように血まみれだった。シンヤの片手が、白いシートからだらりと垂れた。敏子は思わず腰を抜かしそうになったが、猫たちに支えられて、ようやく家まで逃げ帰ってきた。

やがて、野次馬とマスコミでごった返した。新聞記者だという男が、取材に来た。聴力を喪失したトシコに代わって、タカシが対応した。

「期間労働者だった息子さんは急な雇い止めにあって、それ以来引きこもりだったのですが、日常何か変わった行動はありませんでしたか？」

若い髭面の記者が、心の動きを見逃すまいと、タカシの目を覗き込みながら問いかけてきた。

「わかりません。ほとんど、顔も見たことはありませんでした」

猫殺しについて、タカシは黙っていたようと思った。

「精神的におかしくなっていたという噂があるのですが」

「知りません。彼がどうしたんですか？」

「亡くなりました。今夜のニュースで報道されるでしょう。本当に何もご存じないのですね？」

疑り深そうな記者の視線や態度が、不愉快だった。情報が得られないのなら、少しの時間も惜しいといった風情で帰っていった。

テレビが伝えるニュースを見たのは、夜になってからだった。暴れる息子が、父親と格闘を始めた。腕力に勝る息子は、初老の父親に馬乗りになり、拳を振り上げ渾身の力で殴りつけた。父親がぐったりと動かなくなっても、狂ったような殴打は続いた。見かねた母親が、リビングの花瓶を息子の後頭部に叩きつける。ドイツ製の巨大な花器だった。小柄な母親に持ち上げられたことが、不思議なほどの代物だった。

息子は声もたてずに、あっけなく絶命した。母親はすぐに電話を

かけることができなかった。強度のどもりで、筆談しかできなかったからだ。深夜に起こった出来事が、騒ぎになったのは早朝になってからだ。新聞配達員が、母親に呼び止められて通報した。救急車が駆けつけたときには、息子の方はすでに息がなかった。父親も虫の息が残っていたが、病院で死亡が確認された。息子が父親を殴り殺し、どもりの母親が息子を殺した。家庭内暴力の発端を、不況による雇い止めもたらした、息子の鬱病発症によるとこじつけていた。経済不況のしわ寄せが生んだ悲劇だ、とニュースは断じた。

筆談しかできない母親は『もう一度、おまえを産みたい』と書かれたメモ用紙を差し出したきり、何を聞かれても呆然としている。親子の間に何があったのか、好き勝手の憶測が繰り広げられた。

打越家の惨事の影で、もう一つの命が失われていた。朝起き出してみると、トシコがリビングに蹲って肩を震わせている。泣いているのだ。炬燵の布団をはぐって顔を突っ込み、お経をあげている。大きな黒い毛の塊が、動かなくなっていた。

夜のうちに、ダイフクは静かに息を引き取っていた。シンヤにボウガンで撃たれた傷が原因なのか、あるいは猫にも突然死があるのか、判断できなかった。ダイフクの体はすでに冷たかったが、眠っているだけみたい。まだ弾力があり、腕の中に抱き取ると、いつも通り丸くなった。わずかに二週間余りだったが、うち解けた家族のような存在になっていた。唐突な死に、タカシの胸は痛んだ。トシコの念仏は、長い時間続いた。

日が暮れかけた頃、ブリキの缶に入れて、庭の片隅に埋めた。できるだけ深く掘り、スコップで土を被せる。尖った石ころを墓標代わりに乗せ、線香を立てた。トシコとともに、頭を垂れて手を合わせた。残り三匹の猫たちも、悲しそうに並んで座っている。

ダイフクの面影を偲びながら、うる覚えの般若心経を唱えた。シンヤが連れて行ったように思えてならなかった。しかし、なぜか彼を憎む気にはなれなかった。年齢も仕事を失った境遇も似通ったその青年とは、とうとう言葉を交わす機会はなかった。狂気に呑み込まれて猫を殺し、家族を傷つけ、ついには唯一の愛の供給者の手にかかって、この世を去った者を、正確に記憶し悼む人間はいない。ならば、自分がその役目を引き受けてもいいように思った。母親のマツが帰ってきたら、もう一度会いたい気がした。

猫殺しの呪縛から解かれ、笑顔でダイフクを抱くシンヤの姿を思い浮かべた。愛らしい独特な仕草で、飼い主の癒しを誘うあの賢い猫が、シンヤの魂を狂気から引き抜き、救い出してくれることを祈った。塩気の少ない涙が、すうっと瞼の裏を流れた。自然に両者の冥福を祈る言葉が、口について出た。それはトシコが横で唱えるお経と重なり、暮れなずむ町の坂道を伝い、無人となった打越家の二

階にも届いたはずだ。勝手に電源の入ったパソコンの中で、シンヤのブログが《猫を殺す必要はなくなりました》と更新されていることを、タカシは願った。

十

赤いホンダXL250は、壊れた部品を交換し、簡単に蘇った。明日帰郷するつもりで、荷物をまとめる。トシコの聴力は、やや回復の兆しを見せていた。何か用事はないか、と聞いた。すると、はにかんだ笑いを浮かべながら、街のチケットセンターに行つて来て欲しいと言った。お気に入りの演歌歌手のコンサートが、この町であるのだという。

「歌はほとんど聞こえなくても、実物を見られるだけでも、ええかう思うてね。他に楽しみもないし」

その年若い歌手の元気が好きなのだ、とトシコは言った。「ダイフクの死は悲しいけど、うちもすぐに逝くしねえ。ちょっとの違いと諦めることにしたんよ」

残った三匹の猫たちは、あいかわらず腹を空かせて、足元にまとわりついている。キャットフードの蓋を開けながら「演歌でも聴いて歌つて、お経代わりにするけえね」とトシコは笑った。

バイクの試運転がてら、チケットセンターに向き、発券を待つていたとき、携帯がメールを受信した。元派遣仲間の半田からだった。《元気になっていますか？こちらは、介護の仕事がみつきりそうです。ホームヘルパーとやらの資格を取るつもりです。勉強は頭が痛いですが。老人介護はやってみると、しんどいけど意外に楽しいです。また、お会いしましょう》とあった。タカシは、半田が携帯の操作を覚えたことに感心しながら、すぐさま《がんばれ、オヤジヘルパー》と打ち返した。

午後から、プールに出向いた。監視員の仕事を、もう一日だけやる予定だった。水着に着替えて、プールサイドに下りると、ほぼ同時に、アカネたちを連れだした武知クミコが現れた。一時帰郷するため、今日でしばらく来られないことを伝えると「せっかくお友達になれて、アカネたちも喜んでいたので」と残念がった。

「落ち着いたら、必ずまた帰ってきます。この監視員の仕事、自分に向いていると思うんです」

嘘のない本当の気持ち、タカシは口にした。

「ええ、そう思える仕事をできるといいね。お金にはならないかもしれないけど。でも、仕事って少なくとも苦痛じゃないことをすべきだと思う。いくつか掛け持ちしたっていいのじゃない？」

「私も、今のお弁当屋の仕事が楽しくて仕方ない。もともと、何かおいしい物を作って、誰かに食べさせるのが好きだったのね」
鼻の横の雀斑に、いたずらな少女のような皺を寄せた。

一生かけて行う仕事とは、どうあるべきか、と思う。したいこと、苦痛じゃないことをする、それで暮らせれば幸せだ。そう願う一方で、そんな遊びに毛が生えたようなものでいいのか、と自分を戒める。仕事を選ぶ前に、おまえにできることは何だ？と自嘲してみよう。少なくとも父のようにはなりたくない、とタカシは思う。

クミコに促されるまま、他に利用者のいないプールに入り、子供たちの水泳を教えた。アカネが、タカシの元に来た。水に入るのを怖がって泣いていた頃とは違ってかわり、手足を動かし、なんとか水に浮かぶ。

タカシはアカネの手を引いて、後ろ向きに進む。水深百二十センチほどとはいえ、到底足の届かない水の中を、何の不安も見せずに、バタ足をしながら追い縋ってくる。水に顔をつける動作を繰り返し、ぶはあつと大きな息を鼻の穴から吐き出した。

強く握り合った両の指先を、気付かれないうようにするりと弛めて、アカネを水中に解き放つ。溺れそうになったら、すぐに掬い上げつつもりで、顔を見ながら一緒に潜った。

口と鼻からシャボン玉みたいな気泡を出しながら、アカネは真剣な顔で水を掻いている。水中を不器用なストロークでゆっくりと進む。小さな潜水艦みたいに顔だけ浮上させ、空気を吸い込み、再び自分の意志で、力強く潜った。

泳ぎを覚えたばかりのイルカの子供のように、アカネは嬉々として水中を進む。タカシはその姿を、後ろ向きの平泳ぎで見守っている。これが仕事だと言えるなら、派遣社員として電池を作る作業に三交代で埋没していた頃より、はるかに自分は幸せを感じることができる。キミコの病気が快癒したら、再びここに帰ってきたい、とタカシは強く念じた。

プールの時間が終わり、ソファでクミコと話した。また熱い缶コーヒーを買ってくれた。子供たちは、薄暗いロビーで遊んでいる。「経済がすべての根元ね。日本は豊かな国だけど、職を失い収入の道を絶たれると、どんな人間だって飢え死にするのじゃないかと途方に暮れるよね。かつて、私もそうだった。実際、生きる気力すらなくして、孤独死したり餓死したりする弱者も大勢いる。でも、私は、下向かないで素直に助けてくださいって言うことができたの。アカネのことがあったからかもしれない」

母は強いのだよ、とクミコは雀斑を輝かせながら、胸を張った。「そうしたら、見も知らない多くの人に助けられたなあ。行政から、生活の支援を受けることもできた。その申請の仕方を細かく教えて

くれた親切な人もいた。日本っていう国も日本人も、まだまだ捨てたもんじゃないなあって思っちゃった。いまでは、なんとかアカネと一緒に生活しながら、いずれ自分の弁当屋を開きたいなんて、大それた夢を持つこともできるようになったもの」

「経済に打ちのめされてます。先立つものがなければ、愛する者も救えません」

袖のほつれから、羽毛のはみ出た自分のダウンジャケットを見ながら、タカシは言った。ロビーはエアコンが落ち、太陽の光がすっかりなくなっても、いまだに温室のようにぼかぼかと暖かかった。アカネたちが、きやつきやと遊ぶ声が館内に木霊する。

「焦らないで。がんばっていても、それでも煮詰まっちゃったら、卑屈にならないで、素直に助けてくださいって言えばいい。他人には、ただのさぼりの甘えか、そうでないかは、すぐにわかるの。もしたらきつと、親身になって助けてくれる人も現れる。まず家族で助け合うのよ」

クミコは、年の離れた姉が諭すような口調で言った。

「ありがとうございます。妹にもそう言います」

「もちろん、自立する努力を、精一杯し続けるべき。甘えっぱなしで、それが当然と思うようになったらおしまい。尊厳を忘れた人間にはなっちゃダメ。自分の足で立てるようになったら、社会に恩返しする立場にまわれればいい。私も生活保護を、やっとな返上できるめどがついたから、来月からそうするの。めいっぱい働くわ。貧しいけど、よし、やるぞーって感じ」

誇らしげに笑い、そつと片手を差し出して、クミコは握手を求めた。その手を軽くつまむと、励ましを込めて強く握り返してきた。

「いつかまた、アカネの水泳の先生をしてやって。あんなに怖がらずに泳ぎが上達したのは、あなたのおかげだよ。あなたと話していると、無口で控えめだけど言葉にできない安心感みたいなものに包まれる。他人の警戒心を解き、安らぎを与える力があるように思う。それってすごいことだよ、きつと。その能力を活かせる仕事が見つければいいのにね」

外が真っ暗になったロビーのガラス窓に、子供たちが集まって何かを始めた。湯気で白く曇ったガラスは、格好の大きなキャンバスと化していた。指先で、いちばん大きな子は覚えての文字を書き連ね、他の二人は自由気ままな画を描き殴っている。

ガラスの白い曇りの上を這う子供たちの拳が、大きなカタツムリに見えた。幾条もの透明な軌跡は、様々に交錯し、広がっていく。軽く手を上げて、クミコたちと分かれた。アカネの屈託のない笑い声が、いつまでも耳の中に残った。

バイクに乗る前に、サトミの携帯に電話をかけた。三度目のコー

ルで、眠そうな声が聞こえた。

「明日、帰るよ。安心して待っていてくれ」

つとめて明るく、母親の体調を聞いた。

「少し、いいみたい。仕事も休ませてもらってる。岡田社長が、いつまでも休んでくれていいって言ってくれたんですって。長い間、まじめに勤めてくれたからって」

「みんなで助け合って、やっていこうよ。どうにかなるさ」

「うん、大家さんも何かあったら、すぐに相談してちょうだいって」
一階の隅の部屋には、大家の老夫婦が住む。人の良さそうなその顔をタカシは思い浮かべ、いろんな他人に助けられたというクミコの助言を思い出した。

「それからな、おまえ、自分の夢を捨てちゃダメだぞ。奨学金制度もあるし、それで足りなければ、俺がどうにかするから。志望通りの大学に進めるように、すこしは勉強もしろ」

一呼吸以上の間があった後「わかった。サンキュー」とサトミは答えた。

「芸術は死なない。ただ生まれるのみだ」とタカシが言うと、くすくすと笑う声が出た。

携帯の蓋を閉じないうちに、タカシはメールを一通、送信した。
《近いうちに一度、お会いしたいです。お話ししたいことがあります》
本村ナオコに向けたものだった。ナオコへの想いが、幾重にも積み重なり、胸板を突き破って、今にも溢れそうだった。

赤いホンダにまたがり、エンジンをかけた。ガソリンを燃焼させる、コトコトと逞しい鼓動が、尻に伝わってきた。

フルフェースのヘルメットを被り、吐息で白く曇ったシールドを指で拭いた。アカネたちがロビーの大窓に這わせた、拳のカタツムリたちを思い出した。

空気の中には、目に見えない水の粒が浮かんでいる。冷たいものに触れると、見えない粒は白いしづくに変わる。しづくの上を、ひ弱な殻を背負った無数のカタツムリたちが、意志を曲げずに悠々と進み、その軌跡を残していく。誰に顧みられることもなく、すぐさま消え去ってしまう泡沫の記憶が、そこにはある。

彼らは、何も怖れてはいない。頭に突き出た二対の触角のうち、長い方の先には眼があるが、明暗を感じるくらいで、歩みを逡巡させる余分なものは、何ひとつ見えていないから。輝く粘液を垂らしながら、ひたすら自分の生を全うする道を模索する。イチゴパックの中だろうが、朝露に濡れた紫陽花の葉の上だろうが、けして迷わず、余計な苦悩を抱え込んだりもしない。着実な匍匐前進を続けるだけだ。

タカシは、そんなカタツムリたちの強靱さに想いを馳せ、勢いよ

くバイクを発進させるのだった。

〈了〉